

1人のスーパーコーディネーターに頼らない。 地域の仲間と役割分担をしながらできる、 地域コーディネーターの機能

ー第9回寺子屋ローカルSDGs開催レポートー

[地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業](#)では、地域循環共生圏づくりを通して地域を元気にしたいと考える地域や企業が、ともに学び、つながり合う場として「寺子屋ローカルSDGs」というコミュニティをつくっています。

第9回は、かみかつ茅葺き学校 坂本 真理子さんをお招きし、『多様な主体を繋ぐ調整役～地域循環共生圏を実現するためには～』をテーマに勉強会を開催しました。

その内容をレポートします。

かみかつ茅葺き学校 坂本 真理子さんプロフィール

かみかつ茅葺き学校事務局長。徳島県小松島市生まれ。上勝町をフィールドとした森づくり、棚田保全等の実践を通し、協働の必要性和難しさを実感。協働のカギをにぎる調整役機能についての研究活動を行う。人の手と自然が重ねてきた暮らし、景観、何より共に活動してきた仲間がいる上勝町が好きで、ライフワークとして関わり続けている。

地域の調整役「地域コーディネーター」の役割を分解して捉えることで、地域の仲間と役割分担しながら地域づくりができる

坂本：「かみかつ茅葺き学校」という地域循環共生圏のプラットフォーム事業の一員として活動しながら、独立行政法人国立高等専門学校機構阿南工業高等専門学校で研究員をしている坂本と申します。

私は最初「森づくり」に興味があり、上勝町との出会いも自然再生事業がきっかけです。当時は「森づくり」と「地域づくり」を分けて考えていました。ただ、研究者の立場で「森づくり」を進めていこうとすると、地域の方々の知識や技術が必要不可欠であることに気がつきました。これがきっかけで「地域づくり」にも興味を持つようになりました。

まちづくりには協働が必要不可欠ですが、そのまちづくりの担い手になる人材については、これまで「地域コーディネーター」「協働アクティビスト」「地域サポート人材」など、さまざまな言葉で定義されてきました。

地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業では、こうした機能を持つ人の総称として、「地域コーディネーター」という言葉を使っていると理解しています。

まちづくり の担い手

≡ 地域コーディネーター

協働コーディネーター（世古：2007）

- 市民、NPO、行政の「協働」
- **参加のデザイン**（プロセス、プログラム、構成）の専門家

協働アクティビスト（小島ら：戦略的協働）

- 問題、解決策、組織のやる気、活動を結びつける役割
- **自らの資源**（時間、コミットメント、人的ネットワーク、名声等）を**進んで投じ**、協働に影響を及ぼす

地域サポート人材（図示ら：2013）

- 「集落支援員」「地域おこし協力隊」など
- 地域サポート人材、活動地域集落、受け入れ自治体担当者、**3者**がお互い成長しあう関係づくりが必要

私は、「地域コーディネーター」の専門性は一般的ではなく、職能として確立しているとは言えないと思っています。ただ、立場や専門はさまざまであるものの、「調整役機能」とであると捉えることによって、地域の協働の推進に役立つ存在だと思っています。

「地域コーディネーター」の役割を分解して考えることで、1人のスーパーコーディネーターに頼った地域づくりではなく、みんなでその役割を分担しながら地域活動を進めていくことが可能になると考えています。

今日は、この「地域コーディネーター」の役割について、上勝町の事例も交えながらお伝えします。

協働によるまちづくりを行うための、5つのステージ

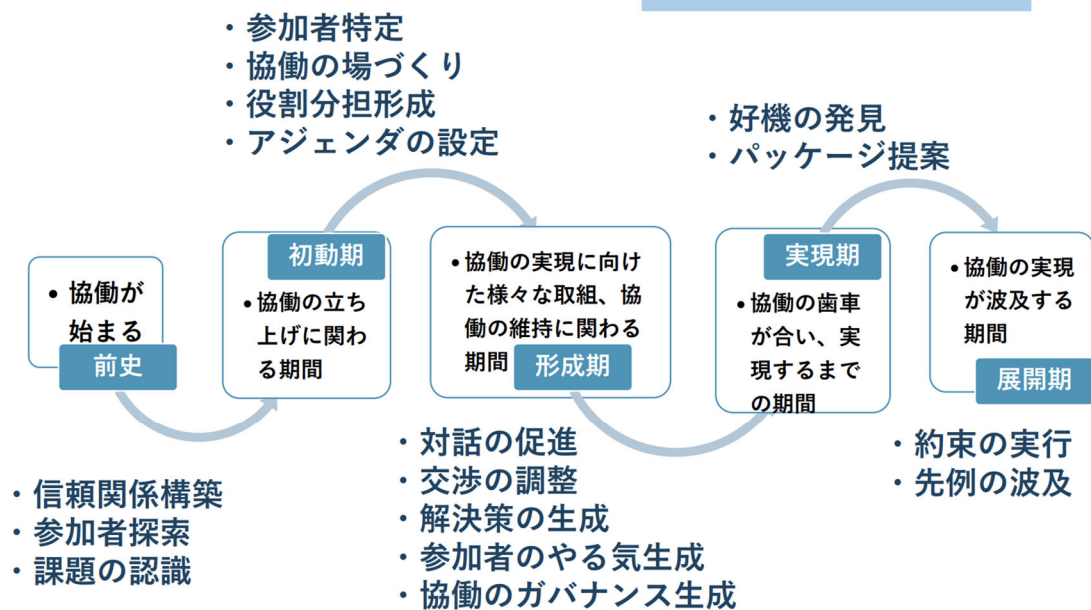
協働のまちづくりにおける調整役機能を、私は期間を区切って捉えています。その期間と活動の目的についてまとめたのがこちらのスライドです。

まちづくりには、全部で5つの期間とそれに紐づく目的があることを研究活動で見出してきました。

- 前史：協働が始まる前の状態
- 初動期：協働の立ち上げに関わる期間
- 形成期：協働の実現に向けたさまざまな活動が活発に始まる期間
- 実現期：協働による活動が具体的に実現する期間
- 展開期：活動が他の活動にも影響を及ぼし始める期間

協働のまちづくりにおける調整役機能

期間の区分と活動目的



実践のプロファイリング手法を用いた協働のまちづくりにおける調整役機能に関する研究 2017坂本,山中,澤田

それぞれの期間について、詳しく説明していきます。

前史

前史の重要な目的の1つが「信頼関係構築」です。地域における複数の役割を果たしたり、地元リーダーとの事前調整をすることで、地元の事情を知っていきます。

次に、「参加者探索」です。地域にどんな人がいて、どんな情熱が転がっているのかを知り、ステークホルダーの関心・利害を整理していきます。

最後に「課題の認識」で、地域の課題を整理します。

初動期

立ち上げにあたる初動期には「公式な場への働きかけ」を始めます。地域で権限を持つ人への働きかけは、地域で本気で活動をするためには必要なことだと思います。公式な場にすることによって、参加しやすくなる関係者も沢山います。

次に「参加者の特定」で、関係者の信頼性や意欲・関心を踏まえながら、ステークホルダーの特定をします。

その後の「役割分担形成」では、協働プロジェクトの役割分担を明確にしていきます。特に、外部交渉をする窓口を明確にすることが、事務局運営上は重要だと思っています。

次に「協働の場づくり」。ここは、地域の活動が生まれていく場所になります。地域で活動する中で、私が特に大切だと思うのは、問題意識を明確にすることです。協働は、最初の時期はとても楽しいし、仲間を感じられるので、すごく活発に行われます。ですが、この活動が「何のために行われているのか？」「自分がどんな目的を持って活動に参加しているのか？」が明らかになっていないと、徐々にトーンダウンしていきます。「参加のルールを決める」「文書として作成・共有する」などの一見すると固いことも大切です。

形成期

形成期に大切なことは「対話の促進」です。対話はやりっぱなしになってしまうことも多いのですが、先ほどお伝えしたように初動期でプロジェクトの目的を明確にすることでやりっぱなしになることを防ぎます。

複数の人でやっている足並みが揃わないことも出てくるので、必要に応じて非公式な場で個別に会話をすることもします。公式と非公式の場をうまくやりくりすることが、このフェーズでは大切だと思います。

形成期には、「解決策の生成」も行います。ここで目に見える成果を出すための道筋が見えることで、活動の参加者のやる気が高まります。小さな活動でも止まらないように作っていき、小さな成功をみんなで重ねていくことが大切だと思います。

実現期・展開期

ここまで到達できると大成功だと思います。地域の共通利益の最大化に向かって活動をさらに進めたり、協働の成果を他の領域に波及させるための活動を行います。

このように、「協働にはステージがある」「ステージごとに異なる活動目的がある」ことを意識しておくことで、いつ・どんなことが必要なのかを把握する手助けになります。

「じい様たちがやりたいことをやろう」からスタートし、多様な強みを持つ人が協働する「かみかつ茅葺き学校」

私がいま事務局をつとめている「かみかつ茅葺き学校」は、まさに複数の地域コーディネーターが協働しながら運営している事例です。

スタートは、集落に茅葺き民家があったことです。「その茅葺き民家を拠点として、集落の再生をしたい」という地域のじい様たちの願いを叶えたいという思いから、活動がスタートしています。

今は、茅葺き民家を拠点とした、地域内外の人が出入りする活動や仕組みを持ちながら、「ゼロ・ウェイストタウン上勝」のパッケージの一部として成長しています。

どのような形で、「かみかつ茅葺き学校」が成長してきたのか、地域コーディネーターの観点からお話していると思います。

茅葺き民家ができたのは、2011年から2012年の間。朽ちかけて山に飲まれそうになっていた古い民家を茅葺きの屋根に再生したことが始まりです。当時「かみかつ里山倶楽部」でやっていた雇用事業でやって来た外部の人が意欲を持って取り組んでいました。

地域住民は、「よく分からないけれど、これで集落が盛り上がるのではないか？」という期待もあり、茅葺き屋根の修復に手を貸し、ほとんど地域住民の手で茅葺き屋根をつくりあげました。

ですが、「かみかつ里山倶楽部」が持続できなくなり、次にNPO法人が管理者になります。その後、地域おこし協力隊がやってきたりもしたのですが、なかなかうまく活躍できずに、宝の持ち腐れ状態で茅葺き民家はポツンとあり続けました。茅葺き屋根の修理に関わったじい様たちは、民家が活用されずに朽ちていくことがやるせなかったと言っていました。

こうした背景の中、「郷の元気」というNPO法人で事業をスタートし、今は「茅葺き学校」として自立して活動に取り組んでいます。

「かみかつ茅葺き学校」は「地元がしたいことを実現しよう」という思いでスタートしたので、最初は「じい様たちが作った屋根を維持しよう」以上の深い想いはありませんでした。

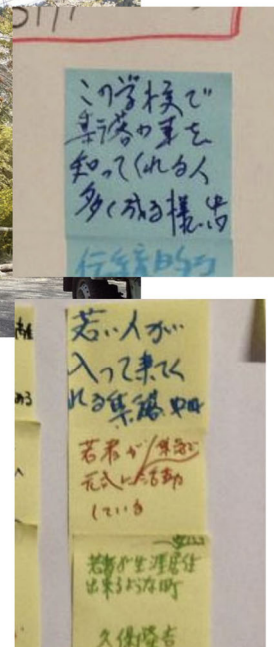
ですが、環境省の事業を通してワークショップを開催し、じい様たちの「この学校で集落のことを知ってくれる人を多くつくりたい」「集落に若者が入ってきてほしい」といった思いを聞くことができた。こうした思いを知ったことで、屋根を維持するだけではなく、地域づくりの拠点にしていこうという気持ちで活動をはじめました。

2020 かみかつ茅葺き学校の自立



地元がしたいことを、実現しよう

「みんなが0.2だしあえば1になる」
みんなで力を出し合おう



そんな「かみかつ茅葺き学校」ですが、様々な強みを持つ人たちで構成されています。

メンバーのAさんは、ゼロ・ウェイストアカデミー事務局長で、現在は上勝町のゼロ・ウェイストの推進員をしています。移住者ですが地域にも精通しており、ゼロ・ウェイストに関わる若者たちを「かみかつ茅葺き学校」につないでくれました。今では、その若者たちが田んぼを作る担い手になって、その情報を地域外に発信してくれています。

Bさんは、上勝町内の「いっきゅう茶屋」というお店の店長をしています。彼女も、10年以上前に移住してきた1人です。じい様たちの気持ちが手に取るように分かる人で、住民との信頼関係の構築にとても貢献してくれています。

Cさんも移住者で、「自然の宿あさひ」の指定管理者をしています。力仕事が得意ですし、機械にも乗れるので、上勝のじい様たちが担ってきた役割を担うことができます。労働を通して、住民との信頼関係を構築しています。

協働の基盤は、人と人との関係性。プロジェクトありきではなく、信頼関係こそ大切に

「かみかつ茅葺き学校」は、先ほどお伝えした協働のステップの【前史】から【形成期】を行ったり来たりしているように感じています。地域づくりは一方通行でゴールまで到達するのではなく、こうして行ったり来たりするものだとも思っています。

大切なことは、お互いの役割の価値を認め合って、助け合える関係性を構築していくことだと思っています。みんなそれぞれ得意分野が違うので、その得意分野をお互いに頼り合える仲間でありたいです。

「かみかつ茅葺き学校」は最初はシンプルに「じい様たちがやりたいことをやろう」からスタートしたのですが、活動を進める中で広がりが出てきて、関係者も増えてきました。

私たちは仲間が増えるたびに信頼関係をまた構築するために、お互いに夢を語ったり、問題認識をしたりを繰り返しています。こうしていく中で、きっと、もっと大きなアジェンダを設定したり、取り組める体制になっていくと思っています。

プロジェクトを追いかけていると、「何のためにやっているのか」「誰のためにやっているのか」が置き去りになってしまうことがままあります。ですが、人と人の信頼関係の基盤こそを大切にすることが、地域で活動をする上では重要です。

=====

「寺子屋ローカルSDGs」学び編では、こうした講義に加え、後半は質疑応答やカジュアルな意見交換の場を設け、より生々しいノウハウの共有を行っています。

「寺子屋ローカルSDGs」は、原則として、地域循環共生圏づくりプラットフォームの登録団体（地域・企業等）またはメールマガジン配信者向けのプログラムとなります。参加されたい場合、まずは地域・企業・個人いずれかでの各種登録をご検討ください。個人配信ならばすぐにご参加いただけます。

◆実践登録地域制度については[こちら](#)から。

http://chiikijunkan.env.go.jp/tsunagaru/chiiki_touroku/

◆企業等登録制度については[こちら](#)から。

http://chiikijunkan.env.go.jp/deau/kigyo_touroku/

◆個別メールマガジン配信については[こちら](#)から、トップページ下部をご覧ください。

<http://chiikijunkan.env.go.jp/>